

謝罪行為にみる日・モンゴル規範意識の相違

—元横綱日馬富士の引退記者会見の分析を通して—

オユナー ノミン(大阪大学大学院)

1. はじめに

2017年11月29日、大相撲の第70代横綱日馬富士(モンゴル出身)が引退の決意を公表した。大相撲の九州場所当初から同国出身後輩力士に対し起こした暴行・傷害事件の報道で世間に注目されていた日馬富士だが、その記者会見の際、被害者への直接的且つ明確な謝罪を行わなかったため、その点をめぐってネット上では視聴者からさらなる批判の声が殺到¹した。そこからは、視聴者が「被害者への謝罪がないことへの違和感」を感じたことが確認できる。

本稿では、上記のような結果に終わった記者会見の場について、日本人とモンゴル人視聴者がそれぞれ異なる期待と意味づけを持っていたのではないかと仮定する。そしてその背景に在る、両者をそのように行動せしめる社会的規範を、詳細な談話分析によって明らかにすることを試みる。

具体的には、1) 日馬富士による謝罪はなぜ批判されたのか、2) 不祥事に対する日本人視聴者と記者陣の反応とその背景にどのようなものがあったのか3) 不祥事に対するモンゴル人視聴者の反応とその背景にどのようなものがあったのか、という3つのリサーチ・クエスチョンを掲げ、議論を進めたい。

2. 理論的枠組み

本発表では、人々の言動には、社会文化的に想定される常識として知られる様々なイデオロギーが広く影響しているとするFairclough(1989)とTrubetzkoy(1969)に端を発するMarkedness Theory(主にdistributional markedness²の概念)を主な理論的枠組みとする。分析では批判的談話分析の視点から、記者会見のテキストに加えて「相互行為」や「コンテクスト」との関連で詳細な記述・説明を行う(Fairclough 1989:25)。考察では、今回の不祥事について日本とモンゴルの視聴者にこのような解釈の違いをもたらしたものは謝罪に対する日本とモンゴルの社会規範の相違に基づく規範意識の差異であると考え、考察を行う。

3. データ：元横綱日馬富士の引退記者会見

本稿でデータとなるのは、2017年11月29日に元横綱日馬富士と伊勢ヶ浜親方らにより開かれた記者会見のやりとり(35分22秒の談話データの一部)の他、日本のインフォシークヤフージャパン、モンゴルの大手新聞 **Өнөөдөр** (Unuudur) のオンラインバージョン、ポータルサイト(news.mn, olloo.mn等)のコメント欄や不祥事が報道されるモンゴルの社会・文化的諸要素を掲載する新聞記事などである。

4. 分析

4.1 日馬富士による謝罪はなぜ批判されたのか

本節では、日馬富士による謝罪はなぜ批判されたのかを明確にする。最初に取り上げるデータ1は、記者会見の冒頭、伊勢ヶ浜親方による引退告知・謝罪後、質疑応答が始まる前に、日馬富士により語られた謝罪発話である。よって、これは記者会見その場の即興で話されたものではなく、日馬富士自身もしくは他の誰かによって予め用意された正式な謝罪文と言える。

<データ1>

01 日馬富士:	このたび(貴)岩間に怪我を負わせたことに(対し)(
02	横綱としての責任を感じ

¹インターネット上の記事やアップロードされた記者会見のビデオへのコメント欄などからこの姿勢を観察できる。リンクを参考文献のウェブサイト一覧に掲載する。

²言語学、意味論においてことばがコンテクストにおいてより自然か否一般的な意味を指す場合 unmarked とされ、それとは対照的により強調される場合、marked とみならず、この現象を Distributional markedness と呼ぶ。

- 03 本日をもって引退をさせていただきます（お辞儀する、15 度程度）
 04 国民のみなさま()相撲ファンのみなさま()相撲協会
 05 伊勢ヶ浜部屋の後援会のみなさま()親方やおかみさんに
 06 ↑大変迷惑をかけたことを
 07 心から深くお詫び申し上げます（お辞儀する、45-60 度程度）

日馬富士はまず最初に、01 で「怪我を負わせた」と語り、今回の事件の核となった暴行行為に触れ、その事実を認める。続けて、02 で「怪我を負わせた」ことに対する「責任を感じ」と引退行動の背景について説明を行った上で、01～03 で「引退をさせていただきます」と具体的な対処方法を告げる。自身の行為により「国民のみなさま」「相撲ファンのみなさま」「相撲協会」「伊勢ヶ浜部屋の後援会のみなさま」「親方やおかみさん」と言った該当する多くの方々に「大変迷惑をかけた」という結果を招いたことを06 で表し、最後07 で「お詫び申し上げます」と謝罪の提示を明確に行う。

それにもかかわらず、記者会見に対する批判の声がネット上で殺到する結果になった。竹野谷 (2004) では、謝罪行為に関して根本的な問題の位置と謝罪が提示される位置との距離を指摘し、それが薄れれば離れるほど、何に対して謝罪しているのかが不明になるとした。データ1での謝罪はその位置からして、根本的な問題である暴行行為に対する謝罪というより「迷惑をかけた」ことへの謝罪であると視聴者に感じられる側面を持っているだけではなく、さらに、謝罪が向けられる対象が「国民のみなさま」「相撲ファンのみなさま」「相撲協会」「伊勢ヶ浜部屋の後援会のみなさま」「親方やおかみさん」となっており、そこには貴ノ岩は含まれていない。

まとめると、日馬富士より「お詫び申し上げます」との謝罪提示がされたものの、そこには被害者である貴ノ岩への直接的謝罪が言及されなかった点が特徴的であり、批判が寄せられる原因となったことが観察できる。

4.2 日馬富士による謝罪の姿勢に対する日本人視聴者と記者陣の反応はどのようなものであったか

本節では、日馬富士以外にもその場にいた者たちの言動を含めた分析を行い、それらの発話が生起する社会的コンテキストに焦点を当てる。

前節で明らかになった被害者への直接的謝罪の不在が多く視聴者に違和感をもたらしたことは日本のネットニュースにおけるニュースのコメント欄から容易に確認できる³。それらの多くで共通して見られるのは、日馬富士に関して被害者への明確な謝罪を求める視聴者の声が著しく、主に「反省していない」や「被害者への謝罪がない」などに代表される内容のコメントである。しかしこれらの意見はすでに記者会見の場で見られたものと同様であった。このことは、以下の日馬富士と記者たちとの一対一の質疑応答のやり取りから読み取ることができる。

<データ2>

- 01 記者: 読売テレビのXXX と申します()横綱にお聞きします
 02 先ほど自分の暴力について弟子を思ってやったことだと話されました
 03 ()今貴ノ岩関に対して思うことはなにかあるでしょうか↑か
 04 日馬富士: 貴ノ岩関に怪我を負わせて()心もたぶん傷ついていると思います
 05 これから()礼儀と礼節を忘れずちゃんとした生き方をしてがんばっていただきたいです
 中略
 10 記者: 横綱に1つ聞きますけれども()今回起こしてしまったことの
 11 重大さ重さというのは今どのように認識していらっしゃいますでしょうか↑か
 12 日馬富士: 今回のことで彼のためになる()そして僕は正しいことをしている
 13 という気持ちが強過ぎたと()
 14 いき過ぎることがあるんだなと思いました()それだけです

まず、着目できるのはデータ2の01にある記者の質問およびその出現したタイミングである。これは、記者会見での代表質問が終わり、個人質問における最初の質問である。これは、予め決められた流れが終わり、日馬富士と記者が自由に対話できる初めての唯一の機会であった。そこで、現れた質問が、データ2の03の発話「今貴ノ岩関に対して思うことはなにかあるでしょうか」であったことは興味深い。データ1の分析で明らかになった通り、日馬富士の正式な謝罪発話に被害者である貴ノ岩への直接的謝罪が言及されず、貴ノ岩に対する日馬富士の思いは不明なまま終わった。03の記者の質問は、直接謝罪の不在への反応であり、日馬富士の思いが言及されずに終わるのは謝罪として不十分であると解釈されたことが読み取れる。日本人の謝罪行動に関する研究として、池田 (1993) は、日本人がとりわけ明確な謝罪表現を重視する傾向にあり、場合によって自分に責任がない場面でも責任を認め、謝罪を行うとしている (p. 19)。

³例えば https://headlines.yahoo.co.jp/cm/main?d=20171130-00000002-wordleafs-fight&s=lost_points&o=desc&t=t&p=4.

そこで今回の日馬富士は、自身の行為により被害者が心身ともダメージを受けた（心もたぶん傷ついている05）ことに気づいていながら明確な謝罪に言及しないことを明示化し、「これから礼儀と礼節を忘れずちゃんとした生き方をさせていただきたいです」（06）と発話することで、自分の行動の正当性（礼儀と礼節を忘れた者には暴力を以って「指導」しても良い）への主張と被害者への明確な謝罪には言及しないスタンスを保ち、それを再表出する。

また、データ2の10～11からも被害者への謝罪の不在が日馬富士の認識不足との解釈につながったことが観察できる。データ2の10～11にある記者の発話に「…起こしてしまったことの重大さというのは今どのように認識していらっしゃいますか」とある通り、この記者は事件の重大さについての日馬富士の認識に再確認が必要と解釈したことが明らかである。これは、日馬富士の様子及び暴行行為に対してではなく、世間を騒がせ多くの方々に迷惑をかけたことに対する日馬富士の反省を受けた反応、および再確認として生まれたものと捉えられる。

まとめると、被害者への思いや事件の重大さに対する日馬富士の認識を問うなどする記者陣の姿勢から、謝罪の場面において直接的な謝罪提示こそが視聴者の解釈や加害者の反省度および“本当の気持ち”を表出させるキューとして働き、さらにその表出が期待されるものであることが確認できる。

4.3 不祥事に対するモンゴル人視聴者の反応はどのようなものであったか

引退記者会見での被害者へ直接的な謝罪の不在をめぐって、日本人の視聴者からはもちろん、その場にいた記者陣からも批判と再確認を求められたことを前節で確認できた。しかし、日本人の謝罪行動の研究は数あれども、モンゴルにおける謝罪場面の研究及びその土台となる規範意識についての資料が管見の限り非常に少ない。今回の不祥事の記者会見はモンゴルでも報道されており、その反応として、新聞記事やネットニュースにおける視聴者コメントの傾向として、最も多く見受けられるのは、「自業自得、お酒はだめ」などの日馬富士に対する批判のコメントであり、続いて「言うことが無い、残念」など事件全体に対する評価を含むコメントが多数見受けられるものの、「貴ノ岩への謝罪」を求める声は著しく少ない点が日本での反応と異なる。

このような事情を踏まえ、一般的に謝罪に対するモンゴルでの規範について考察する。以下モンゴルにおける謝罪に関する先行研究とモンゴル人役人によるモンゴルの事情を説明するインタビューを資料として取り上げる。

日本とモンゴルの謝罪行動に関する比較実験分析を行ったオユーンビレグ, G. (2004) では、謝罪行動に対して、日本とモンゴルでは、機能や表現の違い、コミュニケーション意識に差異が見られるという。日本人は慣用表現を用いて明示的に謝罪を行う傾向にあり、最初と最後に謝罪を繰り返して表現することも少なくない。一方、モンゴルでは、謝罪の慣用表現だけではなく、様々な言語的機能の組み合わせによって間接的に謝罪の気持ちを伝える場合もあり、さらに謝罪を何回も繰り返すことはなく、繰り返しはむしろ誠意がないことを表す可能性を指摘した。

また、モンゴルに関する様々な事情を伝えるものとして2015年の東洋経済新聞に掲載された駐日モンゴル国大使館の商務・経済担当者によるインタビュー（日本語）の中でインタビューイは謝罪に関するモンゴルでの規範に触れている。以下では、その部分とインタビューの取り上げ方などをもとに、そこに潜むイデオロギーに焦点を置きながら今回の不祥事と関連させ分析を深める。

<データ3> 東洋経済新聞、駐日モンゴル国大使館役人インタビュー(2015)とそのコメント欄 (2017年11月28日)

図1

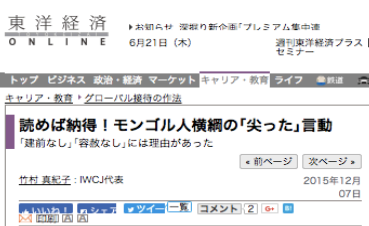
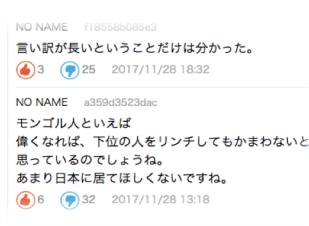


図2



図3



まず、図1から確認できる2015年当時のインタビューに付けられたタイトルに着目する。「読めば納得! モンゴル人横綱の「尖った」言動」とのタイトルからは、モンゴル人横綱の言動は通常より「尖った」ものであるとの内容がすでに読者にとっても既知の情報であるかのように描写されている。つまり、モンゴル横綱の言動は、記事の内容を読まない限り一般的に納得いくようなものではないとの主張が暗示される。図2の、謝罪に関する内容は次の通りである。「助けられたほうも感謝をやたらとせず、恩を返さなければと思いません。やって当たり前なのに感謝をしたら、逆に失礼で怒られることもあります。それに、謝ることも、憎むこともさほどしません。謝っても延々と謝りません」にある「謝ることもさほどしません」「謝っても延々と謝りません」という表現は、オユーンビレグ, G. (2004)の結果を裏付けるものと言える。よって、これらから謝罪はモンゴル社会において「有標」の行動である様子が読み取れる。

図3は、2015年のインタビューのコメント欄における全てのコメント(2件)を表すものである。注目できるのは、2件の掲載された日付が2017年11月28日および日馬富士引退の前日、不祥事が過熱気味に報道されていた時期に重なるものであり、ただの偶然といえないタイミングでのこの反応・内容に「モンゴル人といえば」とあり、当時の不祥事からモンゴル人全体に対する「モンゴル人像」を抱いた様子を確認できる。

5. 考察

5.1 日馬富士による謝罪とは

4.1の分析結果、日馬富士による記者会見での謝罪は、被害者への直接的な謝罪の提示が不在する点で、謝罪に関して日本人視聴者が期待するディスコースタイプに合うものではなく、視聴者に「謝罪」と解釈されるものではなかった。このことから、視聴者にとっては被害者への直接的かつ明確な謝罪の言及こそが“本当の謝罪”であり、その標識がなければ謝罪がなされたとは認識しないことが暗示された。

5.2 日馬富士による謝罪の姿勢に対する日本人視聴者と記者陣の反応とその背景

被害者への謝罪がないことへの違和感が記者会見の場にいた記者陣にも感じられた根拠として、日馬富士の加害者意識を繰り返し問う、記者陣の姿勢を観察できた。視聴者のそのような違和感はモンゴル出身横綱であった日馬富士を同場面に置かれた日本人と同様に振る舞うことを当たり前とする視聴者マジョリティの姿勢「郷に入れば郷に従え」が潜んでいたことからくるものと言えるのではないだろうか。「モンゴル人横綱の『尖った言動』」との新聞タイトルからもわかるように、モンゴル人横綱は通常から外国人である点が前景化される傾向にある様子が見受けられる。

5.3 不祥事に対するモンゴル人視聴者の反応とその背景

分析結果からも明らかであるように、謝罪行為に関するモンゴルでの規範は、無標な形式が重んじられる日本社会のそれとは対照的な傾向にあった。今回の分析や先行研究により、謝罪はモンゴルでは必ずしも明確に提示されない場合があることがわかった。さらに、インタビューの中に見られた「やって当たり前なのに感謝をしたら、逆に失礼で怒られることもあります」との見解が謝罪にも当てはまり、場合によっては、謝罪を一切表明しないことが謝罪を表す可能性もあると考えられる。

6. まとめ

本稿では、2017年11月に引退したモンゴル出身元横綱日馬富士の引退記者会見における謝罪に焦点を当て、それに対する日本人モンゴル人視聴者の解釈とその背景について分析を試みた。分析をまとめると、日馬富士による謝罪は日本人視聴者が同状況において期待するディスコースのタイプに沿ったものではなかったことが明確になった。とりわけ被害者への直接的かつ明確な謝罪提示を重んじる日本の規範意識とは対照的に、モンゴルでは、視聴者が日馬富士への批判を示すものの、謝罪は求めない傾向があり、謝罪を通常とは異なる「有標」の行動と捉える文化的規範があることがわかった。日本人視聴者が抱いた違和感から、同状況における日馬富士には日本の社会的規範に従い、とりわけ被害者への謝罪に言及することが暗に義務付けられていたことが確認された。

通常外国人横綱であることが前景化され、だからこそより日本人横綱よりも「日本人らしさ」を求められるモンゴル出身横綱であるが、謝罪会見において日本とモンゴルとの規範意識の違いが前景化した結果を見ることができた例と言える。

トランスクリプト記号： (.) マイクロポーズ、 ↑上昇イントネーション、 () 身体動作

参考文献

- 池田理恵子 (1993). 謝罪の対照研究—日米対照研究—face という視点からの考察— 日本語学, 12(12), 13-21.
Fairclough, N. (1989). *Language and Power*. London; New York: Longman.
オユーンビレグ, G (2004). モンゴル人と日本人の謝罪行動 日本語教育指導者養成プログラム論集, 3, 75-99.
竹野谷みゆき (2004). 言語行為としての謝罪広告：違法香料事件をめぐる新聞広告の分析 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) メディアとことば Vol. 1. 「マス」メディアのディスコース ひつじ書房 pp. 94-129.
Trubetzkoy, N. S. (1969). *Principles of phonology*, Berkeley and Los Angeles; University of California Press.

WEB 資料 : <https://toyokeizai.net/articles/-/94826?page=2>

<http://olloo.mn/n/48786.html> <https://www.news.mn/?id=265502>

https://headlines.yahoo.co.jp/cm/main?d=20171130-00000002-wordleafs-fight&s=lost_points&o=desc&t=t&p=4.